ソシュールの言語論とレヴィ＝ストロースの変換

（緑色の記述はレヴィ＝ストロースに関連するところです）

ソシュールの晩年、最後の講義(1907-1911 年)が進められ、講義内容は 1916 年に聴講生達のノートから『一般言語学講義』として出版された。しかしこの聴講生達のノートはソシュールの語った講義の内容との齟齬、あるいは誤解を抱えており、出版後 40 年ほど経過した戦後に発見されたソシュール自身の手稿、そして他の聴講生のノートをもとにジュネーブ大学教授ゴデルによる纏めが 1957 年に活字になっている。また 1958 年以降順次、ベルヌ大学教授のエングラーによって講義の内容が活字になり、かくしてソシュールの言語論は、重要な解釈上の転換を生じつつ、「実体概念から関係概念へ」とされるギリシャ哲学以来の西欧哲学の伝統を書き変えつつ、その相貌を明らかにする訳である。「言語論的転回」といわれる現代思想への跳躍、現代思想の始まりとしてのソシュールの言語論は、レヴィ=ストロースの登場とともに、ひろく膾炙するに至っている。

ソシュール以前は、その言語集団内で使用されながら、時代を経て変化を続けつつ、意味を伝えあい記録される言語、言語の使用の総体は、言語（ラング）として包括的に捉えられていたところ、ソシュールはその様態、構造を、三つの術語（概念装置）―ランガージュ、ラング、パロールをもって区別し、いわばシステム論的に捉えようとしていると言えよう。

まず言語を使用する個人と社会のあり様について、社会制度としてのラング（言語）とし、他方個人の身体活動としての言語音の発声の連続を（パロール）、そして個人の精神活動、大脳言語野の活動、言語使用のための人間の潜在能力、言語能力を（ランガージュ）とする三つを措定している。

ソシュールの言語論を、レヴィ=ストロースの示した人間の「自然から文化への移行」という理解を受け入れて眺めるならば、人間の言語使用の主要なエンジンとも言うべきランガージュの活動態を軸にして、人間の言語使用、言語的意味の創造、発語された具体的音声のパロール、ラングと言う社会的な約束、契約をコードとして、意味を生成し、伝え合うと言う、言語の社会的使用の全体がイメージされる。

我が国のソシュール研究の第一人者である丸山圭三郎は、言語が社会的に流通する様態の全体を、弁証法的時間性という表現をもって、そして言語の意味創造、価値形成の視点で眺めようとしており、いわばシステム論的な時間軸をもってのアプローチのようである。

レヴィ＝ストロースは、人間は自然生物的存在から社会文化的存在へと移行した存在であるとして、この「自然から文化への移行」を婚姻規則（インセスト・タブー）の謎解きに

おいて、そしてアメリカ先住民各部族の「神話論理」のストーリーの変換、差異についてを解析、検討をすすめ、「自然と文化の境界線を《道具》の存在の中に見る従来の定説をくつがえし、《コトバ》のうちにこそ、人間の真の飛躍がある」としており、ソシュールにおいては「ランガージュは、人類を他の動物から弁別するしるしであり、人類学的な、あるいは社会学的と言ってもよい生格を持つ能力と見做される[1]」とする視点と同調している。

１．ランガージュとラング

ソシュール以前の言語論において、言語（ラング）として包含されていた内容の内側から、ランガージュとラングとバロールと言う術語が創出されている。

ソシュールの母語はフランス語であり、英語では language という一語の所を、フランス語においては langue と language の区別を生じているという。丸山はこの区別に対応してランガージュとラングを示していると指摘するのだが、我々はまず、言葉の示す意味は各言語によってその範囲、切り取られ方が違う事に気づかされる。

おそらくは人類の前頭葉言語野の活動、その進化の経過をなぞるのであろうが、人間と他の生物との違い、「ホモ・ロクエンス（話す人）を他の一切の動物と分ける、文化の根底に見られる生得の潜在的能力の事[2]」である「『（人間）の言葉』あるいは『言語能力』」とも訳せる述語であり、古来から言葉（ラング）、言霊などとも記された概念を含む、言語使用と、人間の多様に表現され得る抽象化作用、その駆動力、潜在能力と理解される概念を示す術語が「ランガージュ」であろうと理解される。

ラングとランガージュの区別については、「人間の持つ普遍的な言語能力・抽象化能力・カテゴリー化能力及びその活動をランガージュ（langage）と呼ぶのであり、それに対して個別言語共同体で用いられている多種多様な国語体をラング（langue）と読んで、この二つを峻別した[3]」と説明されている。

人の人たる所以である言語能力、ランガージュと、人間の思考力、観念作用との関係については、「思考と音の仲介的場を創る事[4]」とされるランガージュであり、そして「もともとカオス的性格を持つ思考は、それがランガージュによって単位へと分解され配分されるが故に、明確なものとならざるを得ない。[5]」とされている。（『ソシュールの思想』P80）

---

[1] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P80　岩波書店　1989 年 10 月
[2] 丸山圭三郎『言葉とは何か』P66　ちくま学芸文庫 900　筑摩書房　2009 年 4 月
[3] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P79　岩波書店　1989 年 10 月
[4] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P43　岩波セミナーブックス２　岩波書店 2009 年 3 月
[5] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P43　岩波セミナーブックス２　岩波書店 2009 年 3 月

そして講義Ⅲの第二部の１の「ランガージュから分離されたラングの展開[6]」、記号学としての言語の構造が示される。個別母国語共同体で示される国語体としてのラングの社会制度としての側面、個人の活動への拘束性にも拘らず、ランガージュと言う人間の生得能力、シンボル化能力が現前するための条件は、ラングが社会的に覚知可能ならしめる「社会的産物[7]」であり、常にラングによってランガージュは現前すると言う関係が示される。ラングとランガージュの関係の相互性、二重性は、この術語（ラングとランガージュ）の関係によって明らかにされている。

２．バロールとラング

バロールとラングの区別：「ラング＝受動的で集団のなかに存在する。[8]」「ランガージュの活動を組織化し、ランガージュ能力の行使に必要な道具を形成する社会的なコード」としてのラングであり、「ラングが生まれるもととなる契約が成立する為には、数千の個人のパロールが必要であり、ラングと言うのは第一次現象ではない」(同 85P) としている。

そこで個人の言行為、発語行為であるバロールは、「発せられた具体的音声の連続（配列関係)」であり、能動的で個人的なバロールに対して、ラングは社会的制度であると言う。そして「ラングの方が潜在的構造であり、バロールはこれを顕在化し具体化したもの[9]」であり、しかし一方で「ラングはバロールの条件であり規則の体系であって、バロールという行為によってのみ実現される[10]」という関係が説明されている。

ところで 1907 年、ソシュールはジュネーブ大学での 3 回の言語学講義のはじまり、第一回目の講義の後段において、「アナロジーを言語創造の一つの契機と考えたこと、そしてその折にラング、バロールの対立を導入し、この二つが作り作られる永続的な相互依存の関係に置かれている事を強調[11]」していると言う。

この関係をフランスの言語学者マルティネは、情報理論で用いられるコードとメッセージの関係をもって説明しており、情報が受け手と送り手の間で理解される為には、両者には共通のコードが必要であり、このコードに相当するのが各言語の構造としている。IT 時代

---

[6] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P181　岩波セミナーブックス２　岩波書店 2009 年 3 月

[7] 同上　p 185

[8] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P83　岩波書店　1989 年 10 月

[9] 丸山圭三郎『言葉とは何か』P71　ちくま学芸文庫 900　筑摩書房　2009 年 4 月

[10] 同上 P71

[11] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P63　岩波セミナーブックス２　岩波書店 2009 年 3 月

の今日、私達はコードとしての言語（ラング）のメッセージの伝達行為であるバロールとの関係を重ね合わせる事ができよう。

そして言語が発するメッセージ（思考）自身は、言語のコードに乗せられつつその時に初めて生成されて顕在化するのであり、その意味でバロールというメッセージの創出過程そのものは、ラングの構造下、社会制度の拘束の下にあって、しかしながら「個人の意思に基づいたラングと言うコードの個人的行使」であるバロールの発声過程である。バロールの働きが、コード、社会的制度としての言語（ラング）を使用しつつ、ラングを駆動するという相互依存関係の中にあるという、バロールとラングの相互性、互いの二重性が指摘される。

バロールは「ラングと言う社会契約によって自らの潜在能力（ランガージュ）を実現する個人の行為の謂（いい）である。バロールの中には、社会契約によって容認されたものの実現という概念がふくまれている。[12]」としている。そうでありつつバロールとラングの相互性があって、バロールはラングを駆動する側面を有していると言うのである。

参）思想の 83　読むの 88　116

参）**ランガージュ**は、ふつうは「言語能力」また「言語活動」と訳されるが、シンボル化能力の謂[13]と丸山はいう。二つ目の**ラング**は「言語」と訳され、国語体としての音韻、形態、統辞、意味の体系であり、制度と言うべき、構成された社会性を有しており、各言語集団において歴史的な経過を背負って変化をする、社会制度と言うべき構造をなしている。三つめの**バロール**は個人がラングと言うコードをもって他者に呼びかける具体的なメッセージ、その発語行為を含んでいる[14]

3．シーニョ＝（シニフィアン・音）＋（シシニフィエ・意味）

ソシュールの言語論においては、人間は自身の言語使用に係わる潜在能力（ランガージュ）を有しており、その言語集団において使用されるラングと言うコードにのせて言語音声（バロール）を発し、意味を伝え合う交流関係、社会関係を生きる生物であろうか。そしてその場面で、ランガージュはいかなる機序をもって言語使用、意味の伝え合いを可能にするのであろうか？

ソシュール以前の西欧ではギリシャの伝統からのロゴス中心主義であり、あるいはデカルト的な「ポール・ロワイヤル文法」の伝統の中で、「私達の生活世界はコトバを知る以前か

[12] 同上　p 83

[13] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P276　岩波セミナーブックス 2　岩波書店 2009 年 3 月

[14] 同上　P277

らきちんと区別され、分類されている」のであり、事物にせよ、観念、概念にせよ、その存在があって、それらを表すところの言語に違い無いとされる。（言語名称目録観）

これに対してソシュールは「私たちの生活世界は、コトバを知る以前からきちんと区別され、分類されているのではない[15]」としており、「コトバと観念、表現と内容と言うものの同時発生、不可分性」、そして「言語記号が生まれる以前に純粋観念などというものはない[16]」と主張をするわけだ。このきちんと区別され分類されてもいない生活世界を、ソシュールはカオス（混沌）と表現し、カオス（混沌））から切り取られた言語の意味内容、その生成につて、3 つの熟語をもって示しているといえよう。

それが（シーニョ）という記号であり、シーニョはシニフィアン（言語音声）とシニフィイエ（指し示す意味）の一体的にへばりついた単位としてイメージされている。シニフィエは意味するの過去分詞であり、後者が現在分詞である。そして意味が切り取られる以前の「意味のマグマ」というべき状態は星雲と表現されており、その星雲から意味の単位を切り取る働きはランガージュの作動であり、ラングと言うコードに乗せて顕在するところの人間の言語音声（パロール）としてイメージされている。この意味と音声が一体的になった記号的な構成をシーニョ（記号）とするソシュールの言語論は、ここにエピステモロジーとされる所以があると言えよう。

シニフィエ（意味するの過去分詞形・意味）とシニフィアン（意味するの現在分詞形・言語音の響き）が一体となった、シーニョ（記号）という構成、そしてランガージュとは「記号(シーニュ)をつくり出し使用する能力と、それによって実現される活動を指す。能力と活動には、発声、調音など言語の運用に直接関係するもの、抽象やカテゴリー化といった論理的なものも含まれる[17]。」とされている。

『ソシュールの思想』P83 において、ラングは「個人の頭脳に作られ得る心的な構造」とされており、同 P81 では、「人間の能力、人間の普遍にして変わる事ない特徴であるランガージュは、それがその中に実現する、常に個別的であって、変化するラングとは別物なのだ」とされている。脳機能の関与が想定されている。

そして言語音声の差異のみによって識別される、言語の記号としての単位、「シーニョ」が提示され、「シーニョ」とは、音（シニフィアン）と意味（シニフィエ）の一体的な組合

---

[15] 丸山圭三郎　『ソシュール辞典』 p 79　大修館書店　1985 年 2 月

[16] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P40　岩波セミナーブックス 2　岩波書店 2009 年 3 月

[17] http://b.hatena.ne.jp/entry/268332187/comment/suna_zu　2016/06/30

わせであり、その組み合わせられる音と意味の間には法則性は皆無であり、いわば「恣意性」をもって構成され、この組み合わせを指定するのが「無意識」と言うべき人間の意識せざる意味を括り分ける力として想定される観念作用、あるいは象徴機能といえよう。

そして人間の精神活動の基本的な形式であろう恣意性を考察し、それをいわば限定する身体運動（発声運動）からの制約性、その二つが同時駆動する言語使用の様態を説明している。その延長上で、言語の意味生成、さらには価値生成として、人間の精神機能、差異化能力に帰せられる意識世界での類推運動の動きをとおして、「差異」への気付きを画する「差異の二項対立関係」を想定し、非実体的、関係的な規定性としての言語的意味、概念の創出へと動く動態的な言語論を展開している。

レヴィ＝ストロースによる『神話論理』における変換・類推のバリエーションは、反転、転喩、換喩などと、さまざまにアナロジーを重ね、媒介項、中間項をつくり、あるいは対立する二つの両義的な意味を具有する媒介項（蜜や灰）を関与させて、差異、亀裂の縮約を図るとして、人間の精神機能の流れについて示されていると言えよう。その流れは、言語の恣意性に重なると考えられよう。

４．ソシュールにおける人間意識の中の無意識・そして言語の意味
―　音韻論の基本的な方法論について　―
ⅰ）音素
ソシュールの言語論を具現化するにうってつけの音声言語音の単位、「音素」を見出したのがトルベツコイであり、前述プラハ言語学派、音韻論は、音素の発見により誕生したと言われる。音韻論における音素とは音を区分け意味を識別する為の最小の音の単位だが、言語音声の単位の発見は、ソシュールの言語論の記号的に意味を生成するというアイデア、その構造を、そのままなぞっていたと言えよう。

ⅱ）弁別特性（示差的特徴）
言語音声の中に見いだされた膨大な数の音素の中に、それぞれの単語を構成する音素を区別して聞きわけ、 識別するに役立つ対立軸、たとえば無声/有声、母音/非母音、密/疎などの対立関係を見出し、それを弁別特性（示差的特徴）としての二項対立構造を見いだしたのはヤコブソンである。この弁別特性（示差的特徴）のセット（群） として、言語音声の構造としての「無意識の二項対立」という視点で言語音声を整理し、ついに世界中の言語を12 ビットの弁別特性（示差的特徴）の束であると捉えている。
人は音素における弁別特性（示差的特徴）の配列関係、その差異をもって、響き合いの違いを音響イメージとして捉えるのであろうが、その音響イメージと対応して抱かれる言語の意味が想定される。この二項対立して弁別し合う、音素の対立関係、差異の構造をもって

音響イメージを想起させる人間の精神機能がランガージュの機能として想定されうる。

ⅲ）　意味の生成

これら音素の差異、その配列関係の差異を聞き分け、差異関係の識別に係る弁別特性（示差的特徴）は、「無意識の二項対立関係」の関係として整理され、世界中の言語音声は、その 12 の束として網羅されている。その音の響き合いの差異が、意味を浮かび上がらせるのであり、言語音声の指し示す意味は、実体ならざる音同士の関係、その響き方の違い・差異、音同士の相互関係性によって、意味を区別され、意味を指定されるという。

※0805 発語者が自分を取り巻くカオスとされた外界から、その時の発語者における「差異の感興」を切り取り、音声表現が意味をなすのであり、無意識からの指定によって、音声と意味が繋がれて一体を為す意味の単位「シーニョ」が想定される。音の組み合わせ、響き合いの違いによって意味を生成し、展開する言語音声、この意味と音声のつながり、音響的差異によって意味の生成が惹起されるという、ソシュールのアイデアは、言語音声の構造、12 対の示唆標識の配列関係の差異として示されている。

※　「シーニョ」は「言語音」と「言語的意味」が一体的に絆づけられた言語の意味の単位と定義されており、音と意味あいだには何の関係性もない全くの恣意・自由（非自然・非眼前の事実）であり、無意識からの指定と表現される絆が想定されている。

ⅳ）無意識の二項対立・「差異の二項対立関係」

音韻論の無意識について

レヴィストロースは 1958 年の『構造人類学』の第二章「言語学と人類学における構造分析」の中で、「無意識の二項対立」の関係を言語音声の内に見出したヤコブソンとともにプラハプラハ学派の有力メンバー、音韻論を創始したトルベツコイの表現をひきながら、音韻論の四つの基本的な方法論として、「①意識的な現象の研究から無意識のレベルの研究への移行、②分析の基盤を独立した実態としての項から、項と項の関係に移した事、③体系の概念の導入、④一般的な法則の発見という目的の設定」と纏めている[18]。

さらにこの中の①の指摘について、ヤコブソンの講義録『音と意味についての 6 章』の序文の中では≪ソシュールの偉大な功績は、（・・・・）ある外在的データが無意識のうちに存在しているということを正確に理解した点にある≫（３４ページ）とするヤコブソンの言葉を示して、彼の講義の意味を「言語活動の（だがまた、あらゆる象徴体系の）産出におい

[18] 小田亮　『レヴィ＝ストロース入門』P69　ちくま新書 265　筑摩書房 2013 年 9 月
レヴィ=ストロース　佐々木明訳『構造人類学』2 章 P39 みすず書房　1974 年 6 月 20 日

て精神の無意識的活動が負う役割を強調する事によって、人間諸科学に多大な貢献をもたすことは疑いえないであろう。[19]」と展開している。

構造主義の始まり、レヴィ=ストロースの<構造>という世界認識の構図に多大な影響を与えたのがこのヤコブソンの音韻論であり、その講義をまとめた『音と意味についての 6 章（1977 年)』にはレヴィ=ストロースによる序文が記されている。

※体系と変換と構造（『親族の基本構造』の意味合い）

1941 年のニューヨークへと亡命したレヴィストロースは、1943 年から執筆を始めた『親族の基本構造』において、外婚制―自集団の女性を他集団へと贈与し、自集団は他集団から配偶者を娶る婚姻規制（インセストのタブー）―の中の 3 類型は、互いに**「変換」**関係にあって**一つの構造**をなしている事、その構造の中の「変換のルール」というべき体系を説明し、婚姻関係を通して実現されている「親族の基本構造」を説明する。

この理解こそが、ソシュールの「無意識からなる差異のみからなる体系[20]」とした言語理解からの啓示、世界中の言語音を、12 対の示唆標識として「二項対立の組み合わせ」として整理し、それによって各言語音声をパターン化してとらえた「ヤコブソンの音韻論」によって切り開かれた地平であり、「変換と切り離すことのできない〈構造〉」という概念の提示といえよう。

5．言語の線状性と恣意性とレヴィ＝ストロースの自然と文化

ｉ）　言語の恣意性≒非自然性[21]について

ソシュールは言語の二つの性質（恣意性と線状性）を指摘して、言語を発する場、言語表象時の人間の意識・精神機能と関連付けながら、言語使用の総体を説明している。

言語の性質の一つは恣意性であり、人間の言語能力（ランガージュ）は、自分を取り巻く外界、アモルフに連続的に広がる宇宙から、差異の感興、何だかの違いを脳裏に焼き付け、その表象者の抱く指向対象を何だかの「差異の二項対立関係」として構成し、そこから括り出す「言語的意味」という表現で、上記の記号的な単位「シーニョ」が説明されている。

その「言語の意味」を括り出す「二項対立関係の構成」は恣意、自由であり、その意味を括り出すランガージュの駆動態において、その言語音声と意味の間の絆、結びつき方もまた

---

[19]ロマーン・ヤコブソン 花輪光訳『音と意味についての六章』レヴィ=ストロースの序文 P10　みすず書房　1977 年　9 月 30 日

[20] 小田亮　『レヴィ＝ストロース入門』P71　ちくま新書 265　筑摩書房 2013 年 9 月

[21] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P125　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日同上

全くの無法則、恣意、自由としている。この性質をソシュールは**「第一の恣意性」とし、**この指定は人間において意識下の精神機能、「無意識からの指定」あるのみとしている。

次に、それら「シーニョ」はラング（言語）という宝庫に格納されているとの表現になり、ラングをディスクール（言語表現・言説）として活動化する言語表象においては、次々に発語発声する「シーニョ」を、選びとる人間の精神機能、類推作用は「自由・恣意」に展開するとしている。

そのラングの体系内における「シーニョ」の格納の秩序は、類推的秩序によるとされ、ラングの体系は各「シーニョ」間の「差異の関係」**「二項対立する差異の関係」**の「網の目[22]」とされている。その「網の目」について、ソシュールは「分節尺度の相対性、非自然性[23]」を指摘して、その講義Ⅱにおいて「自然的基盤を一切有さない純粋価値体系としてのラングの体系[24]」を示し出し、「関係的同一性と差異」による言語の体系性として、ラングをディスクールとして活性化するラングの体系、その性質を**「第二の恣意性」**としている。

※言語の**第二の恣意性**は「一言語内の記号同士の横の関係（○→○→○→）に見出されるもので、個々の辞項のもつ価値がその体系内に共存する他の辞項対立関係からのみ決定されると言う恣意性のこと[25]」と説明されている。

言語主体は、ディクスール（言語表現・言説）の要請をもって、その指向対象、差異の感興ゆえに、言語を表象するランガージュを駆動して、ラングの倉庫内に格納されている「シーニョ」から、類推作用を駆動して次に発声すべき「シーニョ」を選び取るとされる。そのラングの倉庫は網の目の如くに「差異の二項対立関係」の体系をなしており、イメージの帯、範例関係、記憶の仕切り箱、内的宝庫とも形容される「群化」をなして格納されるべく「シーニョ」の宝庫である。

ⅱ）　**言語の線状性**：もう一つの言語の性質として、ソシュールは言語音発声という身体運動性からの要請としての「言語の線状性」を指摘している。人間の言語能力（ランガージュ）は、（パロール：言語音声）を次々に繰り出して、意味を伝え、呼びかけるのだが、この言語音発声は身体運動であり、一人の言語主体が同時に二筋、三筋を発声する事はできず、「一筋の時の流れ」に乗せて発音せねばならない。

この発声運動からの要請、制約、限定である言語の性質が「線状性」であり、おそらくは

---

[22] 丸山圭三郎『ソシュールの思想 』P98　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

[23] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P197　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

[24] 丸山圭三郎『ソシュールの思想 』P150　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

[25] 丸山圭三郎編『ソシュール小辞典』P86　大修館書店　1985 年 2 月 10 日

言語音（母音・子音）の発声の機序に係わり、人体の咽頭、声帯などの関連する身体組織の構造上の制約下、連続発音の難易度の影響等、刻々と一筋の糸として時の流れに沿って、次々に選ばれ繋がねばならないと言う制約状態を反映している性質と思われる。

「シーニョ」の連続としての言語表象における、言語音声（シニフィーエ）発声上の容易度などに係わる習慣性、言語集団的な傾向性が影響するものと思われ、こうした制約下で現れる言語の性質であり、刻々と、次々に（経時的）に一列に展開する性質と理解されよう。

各「シーニョ」は、類推作用の秩序、恣意性の要請をもってラングの体系に「群化[26]」されて格納されており、それぞれの「シーニョ」の音声（シニフィアン）は線状性に拘束されつつ潜在的に他のシーニョと結びつく〈結合価[27]〉を担っているとされており、「シーニョ」はさまざまな連辞の型を生み出す可能態として説明されている。

ⅲ）言語表象は恣意性を線状性が限定する重合関係

第一の恣意性は言語の記号学的原理によって成り立ち得る。

第一の恣意性は、シーニョを構成する「音素」の配列関係において、その音響イメージを聞き取りつつ、音響イメージを言語的意味として括り出すというランガージュの駆動態であろう。そしてそのシーニョの抱える意味の範囲を配分するところの言語の体系であり、それらは集団的に構築される地質学的な時間制、歴史時間を含意していると思われる。

そしては、「シーニョ」の音素配列の長短を含む分節、「シーニョ」間の結合の恣意性を抱えつつ、集団的に構築された結果としての「シーニョ」の格納庫としてのラング（言語）の体系性において、「シーニョ」を構成する音素の配列関係、音素集合としての「シーニョ」を言語使用の場（コンテクスト）の中で発語（パロール）しつつ、分節、結合する、その動態における恣意性が第二の恣意性である。大脳内に構築されているラングの体系性は、言語使用の場（コンテクスト）において、「シーニョ」を選択し結合するパロールの実践課程、そのランガージュの動態とは同調的に「第二の恣意性」を体現している。二つの恣意性は、共に音的な配列関係において、恣意に意味を抱えるという言語の機序を支えている。

そして、人間の意識作用としての言語の恣意性は人間の精神機能、類推作用に対応する連合の軸によるとされ、他方の線状性は人間の言語音発声運動、身体機能に係わり、一筋の糸のように時々刻々、次々に発語、発音を進めるべく、連辞の軸とされる。言語表象に際して人間はこの二つの機能の同時駆動状態において、あるいは二つの機能の葛藤状態の中で、パロールの連鎖を組み立て、メッセージとして生成していると思われる。

---

[26]丸山圭三郎『ソシュールを読む』P167　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

[27] 同上　p 87

この二つの軸を、レヴィ＝ストロースの言う自然から文化への移行過程にある人類の存在様式を通して眺めると、言語表象は、消える事の無い自然生物性の響き（線状性）を抱えつつ、社会へ文化性への移行を記す（恣意性）を自然生物性（線状性）に限定、拘束されつつ展開する、人類の抽象化作用、概念化作用、象徴機能を深化させつつの、人類の営みと言えよう。（20220816）